

平成29年11月12日(日)／札幌市・道新ホール

地域が支える子どもの未来 ～スポーツとあそびで育む心と絆～

平成29年度の「社会貢献フォーラム」は、北海道札幌市で開催された。第1部では、プロボクシング元WBC世界フライ級チャンピオンで、現在はタレントとしても活躍する内藤大助さんの講演、第2部では北海道内で行われている様々な社会貢献活動の事例を見ながら、子どもの成長や地域の絆の醸成において社会貢献が果たす役割について、パネリストが意見を発表した。会場には約300名の市民が詰めかけ、熱心に耳を傾けていた。フォーラム終了後には、内藤大助さんのサイン入り著書やDVDが当たる抽選会も行われた。

主催：

全日本社会貢献団体機構、北海道新聞社、全国地方新聞社連合会

後援：

北海道、北海道教育委員会、札幌市、札幌市教育委員会、NHK札幌放送局、

北海道文化放送、共同通信社、全日本遊技事業協同組合連合会、

札幌方面遊技事業協同組合



第一部 講演

スポーツが変えた心

内藤大助さん(タレント、元プロボクサー)

僕は高校を卒業するまで、ここ北海道の虻田郡豊浦町にいました。高校3年生のときに洞爺湖温泉のホテルに就職が内定していたのですが、そこでのアルバイト中の態度が悪かったせいで入社式の1週間前に内定取り消しになりました。僕は母子家庭で、母に育てられていたわけですが、家を追い出されるように、卒業後に上京しました。

母親は厳しい人でした。子どもは親にほめられたいという気持ちがあるものですが、僕の母は子どもをほめることがしつけに悪いと考えている人で、一度もほめられたことがなかった。プロボクサーになり、全日本新人王トーナメントで優勝して新聞に名前が掲載されても何も言わない。29歳11ヵ月で日本チャンピオンになったときも一言もない。それでしびれを

切らし、「何か言うことねえか?」と言ったら、「何かあったのか?」と返してくる。「俺、とうとう日本で一番になった。そんなときくらいほめることができねえのか」と、生まれて初めて文句を言いました。すると母は、「ボクシングには、その上があるんじゃないの?」と言う。世界チャンピオンのことを言っているのですが、そのときに「ふざけんな。世界がどういところか知ってるのか?」と言り返したら、「バカもん、そのくらい人間でないと人をほめるなんてできないんだ」と、逆に怒鳴り返されました。

僕がボクシングを始めたのは二十歳のときですが、その動機には、中学生のときに母子家庭や貧乏をネタにひどいいじめを受けた体験があります。そのせいで、大人になって

も、いじめっ子が怖かった。ボクシングを覚えて強くなったら、その恐怖から逃れることができると思い、近所のボクシングジムに通い始めました。

でも、いざボクシングをやってみると、ボクシングは決して暴力ではなく、ルールのあるれっきとしたスポーツだということがわかった。毎日、トレーニングを続けたら、強くなっていく。何が強くなるかと言えば、腕力ではない。心なんです。ボクシングを始めて1年過ぎた頃に、今だったらもういじめられない、いじめっ子に会っても「いい加減してくれ」と言えると思った。そう思えたら、フッと気が楽になった。心次第で人間は本当に変わることができるということを、僕はボクシングから学んだ。だから、ボクシングには感謝しかない。

やはり一生懸命続けるということが大事です。一生懸命がんばる人には、人がついてくる。こんな僕でも、きれいな奥さんと結婚できた。それは僕が一生懸命ボクシングを続け

ていたからだと思う。最初の世界戦は34秒でKO負けをして、それで日本人の恥とまでいわれた。それでもがんばって日本チャンピオンになったが、二度目の世界挑戦も勝てなかった。奥さんにも「これで引退する」と言ったが、セブ島と一緒にトレーニングしていたフィリピン人ボクサーたちの言葉に励まされ、再びボクシングを続けることに。そして、三度目の世界挑戦でとうとう世界チャンピオンになった。

何でもそうですが、つらい、つらいと思ってやっていると続かないし、上達もしない。どうせやるなら楽しくやりなさいと言いたい。確かに練習やトレーニングはつらい。でも、それも気持ち次第。発想を変えて、楽しみながら続けることが大事です。「毎日、楽しい、楽しいと思っていたら、楽しいことが来る」と、奥さんからそう教わった。素直に楽しい、うれしいと思ってやるのが大切。僕は何をやるにも、そう思うように心がけています。



第二部 パネルディスカッション

地域が支える子どもの未来～スポーツとあそびで育む心と絆

中野さん 地域社会を支える、様々な社会貢献活動が道内でも行われていますが、その力や可能性について、みなさんと一緒に考えていきたいです。まず初めに、北海道教育大学岩見沢校の学生のみなさんから、それぞれの活動について紹介していただきます。

辻本さん 私は総合型地域スポーツクラブ「スポーツライフデザイン岩見沢」を運営しています。その1つが、ボールを使って子どもたちの創造力を育むことを目的とした運動プログラム「バルシューレ」です。多様な運動を経験すること、子どもの発達に即していること、楽しいものであること、潜在的な学びに通じていることの4点を基本原理としています。楽しくないとも続かないと思うので、子どもにとって動くことが楽しいという状況を作り出すよう、指導者は工

夫をし、ボールゲーム学習ではゲームを最優先し、ゲーム中には指導的な介入をしません。子どもたちが楽しみながら運動を行うことで、「学習している」という意識を持つことなく、遊んでいるうちに基本となる技能や能力を身に付けることが可能となります。

片岡さん 続いて、「リトスシューレ」を説明をします。音楽の基礎要素であるリズムや歌うことを中心に取り上げ、遊びの中で感性を育むことを目的としています。先月実施した活動では『崖の上のポニョ』の主題歌に合わせ、カップと手拍子と歌を使ってリズム遊びをしました。スポーツや言葉など、リズムは音楽以外のことともつながっていて、そこから様々なものが生まれる可能性があると考えています。知識にこだわらず、感じたことを体を使って表現することを

出席者プロフィール



内藤大助さん
タレント・元プロボクサー

1974年、北海道虻田郡豊浦町生まれ。2004年、日本王座獲得。07年、3度目の挑戦でWBC世界フライ級チャンピオン獲得。同年、初防衛戦で亀田大毅を倒し、因縁の対決として話題となる。11年、現役引退。現在はタレントとして活躍中。



山本理人さん
北海道教育大学岩見沢校教授

1962年、東京都生まれ。東京学芸大学大学院修了。専門はスポーツ教育学。生涯学習社会におけるスポーツ学習支援のあり方について研究を行っている。2015年より「冬季オリンピック・パラリンピック開催概要計画検討委員会」委員などを務める。



合田康広さん
札幌方面遊技事業協同組合理事長

1965年、北海道弟子屈町生まれ。2011年、(株)アイルテック代表取締役就任。16年、札幌方面遊技事業協同組合理事長就任。社会貢献の重要性を業界内に浸透させ、スポーツ支援を通じた青少年の健全育成など、様々な社会貢献活動を推進。



荒木太郎さん
北海道新聞社事業局事業センター部長

1963年、札幌市出身。早稲田大学政治経済学部卒業。87年、北海道新聞社入社。網走支局、乗山支局、旭川報道部、大阪報道部、東京報道センターなどで勤務。運動部では長野オリンピックやノルディックスキー世界選手権などの取材を担当。



コーディネーター
中野涼子さん
北海道文化放送アナウンサー

神奈川県出身。2010年、UHB入社。スポーツ番組のMCや、北海道マラソンでUHB女性アナウンサー初のバイクリポートを務めるなど、スポーツ取材を中心に担当。趣味はクラシックバレエ、ジャズダンス。フルマラソンの完走経験も持つ。

北海道教育大学のみなさん

辻本智也さん
北海道教育大学岩見沢校大学院 教育学研究科

片岡日菜子さん
北海道教育大学岩見沢校
芸術・スポーツ文化科学科 音楽文化専攻

藤原知世さん/小林鈴奈さん
北海道教育大学岩見沢校
芸術・スポーツ文化科学科 音楽文化専攻

大切にしています。

藤原さん／小林さん 「マルシューレ」の活動を紹介します。マルシューレは幼稚園児から小学生までの子どもの遊びを中心とした造形プログラムです。美術とあそび、美的体験、自分で作ることの3つを基本原理として、子どもたちが遊びにのめり込む中で、感性が自然に育まれるように工夫されています。マルシューレでは、子どもたちがセロファンやペンを使ってビニール袋に自由に飾り付けをしたり、木片やペットボトルのキャップを使って造形活動を楽しんだり、絵の具で作った色水を画用紙に好きなように垂らしたりして遊んでいます。これからも遊びを通して美術を好きになってもらえるように取り組んでいきたいと思っています。

中野さん 次に、札幌方面遊技事業協同組合理事長の合田康弘さんから、組合や組合傘下の法人、パチンコホールなどが行っている社会貢献活動を紹介していただきます。

合田さん 今回のテーマでもある少年とスポーツに関するものとしては、当組合傘下の法人がNPO法人を設立し、少年野球専門の野球場を建設して少年たちに無料で貸し出し、さらに全国規模の野球大会を毎年開催して、今年24回目を迎えるというものがあります。この他にも道内のホールの取り組みとして、剣道、バレーボール、バスケットボール、車いすサッカーなどの支援をしております。また、岩見沢地区の総合型地域スポーツクラブの設立に際し、資金支援をさせていただきました。

今年は8月以降に北海道内に次々と台風が襲来し、死者、行方不明者が出る事態となりましたが、被災者支援として、北海道新聞社会福祉振興基金を通じて北海道災害義援金募集委員会に義援金200万円を寄付させていただきました。当組合の地区単位の組合では、災害時に

パチンコホールの駐車場を被災者支援や復旧活動などに活用していただくべく、関係自治体と災害時の支援協力に関する協定を締結しているところもあります。

社会福祉に関する支援としては、パチンコホールが行うファン感謝デーの売上金の一部、約230万円を北海道新聞社会福祉振興基金に寄贈させていただきました。さらにプロ・アマゴルファー参加によるチャリティゴルフコンペを企画し、その売上金を北海道移植医療推進協議会に寄贈しています。また、冬の札幌雪祭り会場に臓器移植啓蒙活動のための氷像を出展し、臓器提供意思カード登録の働き掛けをしています。

単に資金提供だけでなく、マンパワーを地域のために役立てるよう、例えば遊技業界団体共同で「すすきのごみ拾いボランティア活動」を実施するなど、日々、活動に努めています。

中野さん 続きまして、北海道新聞社の社会貢献活動の事例を荒木さんから紹介していただきます。

荒木さん 北海道マラソンを始め、北海道新聞社では年間約250件のスポーツ事業を共催、主催していますが、創業130周年、創刊75周年の今年、新たに「スポーツ応援宣言」を掲げました。スポーツには多くの人を巻き込んで地域に一体感を作り、元気づける不思議な力があると思います。この宣言にはスポーツの持つ力を使って、北海道を盛り上げていきたいという狙いがあります。

また毎年、スポーツ界で活躍した人に北海道新聞スポーツ賞を贈っていますが、従来の枠とは別に、将来有望な若手アスリートや長年指導に就かれている方々をたたえようと、新たに奨励賞を設けました。障がい者スポーツの振興にも力を入れ、バンクーバーパラリンピック・パラアイスホッケー



AJOSCの活動資料を読む参加者

銀メダリストの永瀬充さんに北海道新聞バラスポーツアドバイザーになっていただきました。

スポーツ以外では、1965年に北海道新聞社会福祉振興基金を設立し、各種の助成事業、高校生などへの奨学金、社会福祉法人への低利貸付事業などを行っていますが、この基金には札幌方面遊技事業協同組合をはじめ多くの個人、団体などから毎年、寄付をいただいています。

中野さん 地域が支える子どもの未来についても考えて行きたいのですが、北海道教育大学岩見沢校で行われている地域貢献を山本教授から報告してください。

山本さん 我々の岩見沢校は教員養成系大学でありながら、スポーツ、音楽、美術に特化して地域の人材育成をしようという考えのもとに再編され、運営を始めています。我々が実施している「あそびプロジェクト」は、その対象が地域の子どもたち中心ですが、大人も含め、誰もがスポーツや芸術などを通してしっかり遊べる社会を作ることが目的です。大学の資源を地域に開放しながら、そういう遊びの機会を増やしていきたい。ポイントとして、地域住民の自立的な文化活動の支援、地域文化の創造・発展・継承、地域の活性化(まちづくり)の3点がありますが、音楽や美術やスポーツを切り口に、学生を中心に地域の人たちと連携しながら様々な活動をしていく中で、最終的には芸術やスポーツに関係ない地域住民の方にも満足していただけるような地域になってもらうことが願いです。

中野さん 最後に今後の可能性も含めて、お一人ずつメッセージをいただきたいと思っています。

山本さん 地域貢献や地域連携というと、どうしてもイベント型や教室型のものが多くなりがちですが、そういうものが地域で芽を吹き、本当に息長く育つための環境づくりをみ

なさんで支えていくような社会貢献や地域貢献のあり方が今後、重要だと思います。

合田さん 私どもができる範囲で、後方支援として今後も少年のスポーツ大会などの共催なども含め、色々とお手伝いできればと考えています。将来的に、その少年たちがトップアスリートとなって世界に羽ばたいたり、その道を極めるような子どもたちが出てくるのを楽しみにして、今後も支援を続けていきたいと考えています。

荒木さん 数年前に千歳の少年院取材しましたが、ここでは少年たちが定期的にトレーニングに取り組んでいます。そこを紹介してくれた大学の先生によれば、それによって物事をやり遂げる大切さ、達成感、努力することで自分を磨くことを学べるということで、彼らが少年院を出た後で、色々な試練を乗り越えるメンタル的な強さも養うことができると話していました。やはり体と心の両方が大事だと、今その話を思い出しました。

内藤さん 今日は本当にいいお話が聞けました。スポーツをやっている思ったのは、トレーニングは大変で、つらいこともたくさんありますが、それを乗り越えるには、やはり楽しくやるのが一番だということです。プラス思考、ポジティブで続けてほしいと思います。

中野さん 一人でも多くの人が社会貢献活動に参加して、地域を支えるきっかけにいただければと思います。本日はありがとうございました。

青少年の健全育成は我々の責務 社会貢献の継続で地域に関わる

札幌方面遊技事業協同組合理事長 合田康弘さん

今回、私ども組合員のみなさんが幅広く社会貢献活動に参加をしていることを再認識し、業界としても喜ばしい限りです。北海道教育大学岩見沢校の取り組みも非常に有意義なものだと感じました。青少年の健全育成の支援はあくまでも一つの分野ですが、我々も地域の一員として大きな責任を持っておりますので、今後も継続したいと思っています。地域と密接に関わりながら、社会貢献として収益の一部を還元していることを、少しずつですがパチンコをされない方にも広めていけたらと考えています。

